

騎手の拳の感覚

常歩なり、速歩なり、駈歩の騎乗の際、感じる騎手の拳の感覚とは、いついかなる場合でも絶えず馬が自分の両拳に対して柔らかく入ってくるような感覚である。それを少しでも引いたり、抑えたりしているような状態は決してよいものではなく、まだ不十分な状態であると感じるべきである。

騎手の拳に感じる馬の口の感覚とは、何も抵抗がなく柔らかく、かつ確実な手ごたえである。その馬の口は騎手の拳または手綱を引いたり、対抗したり、重ったり、巻き込んでハミを外しているような状態ではない。むしろ、気持ちよく騎手の拳に向かってくる感じであり、必要に応じて馬の前進氣勢を感じ、または収まっている感じがあり、柔軟性と軽快性を感じる。それ故、騎手の拳は前方へわずかに譲るくらいの気持ちで十分で、しかし、そこには体重・脚による推進のもと確かな依倚を感じ、馬体の硬さは感じられず、のびのびと騎手の拳に何のためらいもなく馬は出て来る感覚である。そういう中で、必要に応じて外方の拳に支点を感じるべきである。

そのような状態であれば、馬の後肢の踏み込みは確実に必要なだけ現れ、また歩度の伸長の際には、騎手の拳のわずかな譲りに対して頭頸の伸展をしながらも確実な依倚を馬は求めてくる。一方歩度の短縮に際しても、わずかな券の握りに対して馬は抵抗することなく、柔らかい依倚のもとで歩度が縮まってくるという具合に、自由自在の感覚を得る。

そのためにも内方姿勢騎乗を人馬共に理解することが必要である。内方姿勢騎乗に対して大切なことは、内方脚に推進による外方手綱に対しての押し出しと、それを受ける外方手綱の張りであるが、そのような状態の中で、馬が絶えず外方手綱に出てくるのが大切であり、それによって外方の口に支点を感じることができる。すなわち、外方に支点を求めることは、内方の口または手綱より外方の口または手綱に心持強めの依倚を感じるということである。それによって馬は内方姿勢をとることができ、回転動作が滑らかに行うことができる。

もし、内方の口または手綱に強く支点がかかっていたなら、それだけで馬は馬体を硬くし、しいては内方後肢の踏み込みを損ない、滑らかな回転ができなくなる。それ故、我々は外方に支点を求めて騎乗する訳である。そのためにも内方拳を外方拳より半拳または1拳ほど上に保ち騎乗することは、内方手綱を引いたり、抑えたりすることを防ぎ、一方外方拳の静定を助ける。

また、内方拳の譲りとは手綱がたるむほど弛めることではなく、数ミリ弛め、状況によってわずかな拳

の指の握りの強弱で十分である。そして必要に応じて、わずかに内方拳を上方へ上げるだけで馬にその譲りを与えることになり、また馬の口との依倚を放棄することなく保つことができる。そのためにも騎手は肩の力を抜き、腕全体を柔らかく保ち、特に手首の柔らかさを維持する。そして、肘を適度に曲げ、肘の角度を保つことである。決して肘を伸ばしきりにしないことである。肘を伸ばしきりにしているということは、すでに肩から腕全体が硬くなっていることであり、そのような状態ではきっと拳を上から下へ抑えつけているだろう。これはとてもいけない状態なので、慎むべきである。むしろ肩の力を抜いて、腕・手首・拳を柔らかく保ち、肘に適度に角度を保ちながら、両拳を譲る感覚で騎乗するべきである。そうすれば馬も馬体全体の力を抜いて拳に向かってくるし、特に頭頸の力を抜いてくるものである。

そのような状態の中で、必要なだけ馬の外方の口に支点を感じることである。そして、そのときもし口に抵抗を感じたら、それ以上に内方脚にて外方の拳に向かって推進を加えると共に、外方の拳の握りを強める。また、このとき逆に馬が抵抗を示したら、外方の拳の握りが適当ではない場合があるので、逆に少し譲り、馬の頭頸または口の楽さ（抵抗がない状態）の中でもう一度握ってみる。そうすると、その外方拳の握りを馬は受け入れるものである。外方に支点を求めてるということは単純に外方拳を強く握ることではなく、あくまでも馬の頭頸および口の楽さの中の握りである。

そのようにして外方に確かな支点を感じたら、必要に応じてわずかに内方の拳を譲ることが更に大切である。と同時に必要なだけ馬を推進しておくことは言うまでもない。そして本当に左右の拳に抵抗感がなかったときは、わずかに両方の拳を譲ってみる。そのとき決して依倚を放棄することなく、むしろ依倚を感じながらも馬の頭頸または口の楽さを与えることと、馬の両側の口の軽さおよび抵抗感の無さを確認することである。このとき、馬体を伸ばすことは不可。この動作は常歩・速歩・駈歩中のいずれかの場合にも行うことができる。

ここで特に駈歩中の騎乗の内方拳の感覚を説明しよう。基本的にはこれまで述べてきたことではあるが、一般的には内方の拳が馬の動きと逆の作用をしているケースがしばしばある。駈歩の馬の動きというのは第1期、すなわち外方後肢の着地から始まるが、このとき馬の前軀は起きるものである。この時、騎手は外方拳にわずかに支点を感じながらも両拳（特に内方拳）を前方に譲るべきである。それによって馬は前方に頭頸を伸ばしていけることになる。そしてこの後、駈歩の第3期から5期にかけて、馬は騎手の拳に支点を求めてくる動作を示してくる。この時騎手は必要に応じた依倚の強弱を感じるべきである。

また、よく馬の駈歩の動きを感じると、あまり意識しなくても、駈歩の第1期での拳の譲りを与えても第3期から第6期にかけて自然にもとの手綱の張りに戻ってくるのを感じることができる。そして必要

に応じて、外方拳の握りと内方拳の譲りを馬の動きを妨げることなく、馬の口に拳がついていくことができれば馬がのびのびとした大きな駈歩を行うようになる。その時、騎手は馬上に真っ直ぐ上体を保ち、脚を所定の位置に保って馬の動きについていけば、よりその感覚が理解できる。馬の動き、特に馬の口に拳がついていくことがとても大切なことである。このことはその後の歩度変換、反対駈歩、簡単な駈歩変換、そして踏歩変換の感覚に非常に大きな影響を及ぼすものである。それ故、この拳の感覚を是非正確に感じて欲しい。

D S T コラムへのご質問・ご感想をお待ちしております。